

シベリアの古典植物文献あれこれ

松本市 豊 国 秀 夫

1 はじめに

「北方山草」第4号のテーマがアジア大陸ということなので、アジア大陸の中でも特に北海道の高山植物、山草と植物地理学上密接な関係を持つシベリアの植物——それについての古い文献を思いつくまゝに記して見たい。

本題に入る前に、一応日本の高山帯と日本以外のアジアの地域とに共通分布する植物について少しふれて置くことにする。

「北方山草」第2号(1981)の拙稿「日本の高山植物相の区系植物地理」中に記述したように、日本の高山帯に自生することが知られているシダ植物および種子植物の種類数は574である。その中で、日本の固有種をも含んだアジア要素は、347種、60.5%と高率を示している。その347種中日本の固有種187種を除くと、160種、27.9%。これが、日本の高山帯と大陸部分を含むアジアのどこかに共通に産する種である。参考までに、それらの名称を種の単位(亜種、変種、品種も含めた)で列記すると次のようになる。

シダ植物

イッポンワラビ、オオメシダ、ミヤマヘビノネゴザ、ミヤマイヌワラビ、ミヤマウラジロ、オクヤマシダ、タカネシダ、カラクサイノデ、以上8種。

種子植物—裸子植物

トウヒ、ハイマツ、イブキ、以上3種。

被子植物—双子葉植物

エゾミヤマヤナギ、ミヤマヤナギ、ダケカンバ、カマヤリソウ、チシマヒメイワタデ、ウラジロタデ、カラフトダイオウ、メアカンフスマ、タカネミミナグサ、スガワラビランジ、シラオイハコベ、シコタンハコベ、リシリブシ、キタダケソウ、ミヤマハンショウズル、モミジカラマツ、レブンキンバイソウ、ボタンキンバイ、ミヤマオダマキ、コマクサ、イワハタザオ、モイワナズナ、オクエゾナズナ、ハクセンナズナ、ユウバリミセバヤ、ダイモンジソウ、クモマユキノシタ、チシマクモマグサ、ヤマハナソウ、オニシモツケ、エゾノシモツケソウ、ノウゴイチゴ、シロバナヘビイチゴ、ミヤマキンバイ、メアカンキンバイ、ミネザクラ、カライトソウ、ナガボノシロワレモコウ、タカネナナカマド、イワオオギ、ヒダカゲンゲ、ヒダカミヤマノエンドウ、グンナイフウロ、エゾフウロ、ヒメナツトウダイ、ツルツゲ、ムラサキツリバナ、ミネカエデ、オガラバナ、イワオトギリ、タカネスミレ、ヒメアカバナ、ミヤマアカバナ、アシボソアカバナ、ミヤマセンキュウ、ハクサンボウフウ、チシマニンジン、ミヤマウイキョウ、以上58種は離弁花。

カラフトイチヤクソウ、コメバツガザクラ、チシマツガザクラ、コヨウラク、キバナシャクナゲ、イワツツジ、オオパスノキ、ユキワリソウ、サンブクリンドウ、チシマ

センブリ、リシリリンドウ、タテヤマリン
 ドウ、エゾリンドウ、チチ布林ドウ、ミ
 ヤマムラサキ、エゾルリソウ、オオバミヅ
 ホウズキ、シオガマギク、エゾシオガマ、
 キクバクワガタ、エゾヒメクワガタ、スル
 ガヒョウタンボク、クロミノウグイスカグ
 ラ、チシマヒョウタンボク、ウコンウツギ、
 ムシカリ、タカネオミナエシ、モイワシヤ
 ジン、タニギキョウ、アサギリソウ、エゾ
 ノサワアザミ、フタマタタンポポ、ミヤマ
 アズマギク、タカネニガナ、エゾウスユキ
 ソウ、ウスユキソウ、トウゲブキ、カラフ
 トアザミ、ミヤマオグルマ、オダサムタン
 ポポ、以上40種は合弁花。

単子葉植物

フトヒルムシロ、チシマザサ、ミヤマヌ
 カボ、ヒメノガリヤス、タカネノガリヤス、
 ミヤマノガリヤス、ミヤマドジョウツナギ、
 ヒロハノドジョウツナギ、カラフトイチゴ
 ツナギ、ミヤマイチゴツナギ、ヒメカラフ
 トイチゴツナギ、ヒラギンスゲ、タカネシ
 ヨウジョウスゲ、ヒメアゼスゲ、ミヤマク
 ロスゲ、イトキンスゲ、ユハリスゲ、ヤリ
 スゲ、センジョウスゲ、タカネヒメスゲ、
 ホロムイスゲ、カワズスゲ、ヒカゲハリス
 ゲ、ヒメスゲ、マンシュウクロカワズスゲ、
 ツルスゲ、ミヤマアシボソスゲ、タカネナ
 ルコ、ゴンケンスゲ、ミヤケスゲ、イワス
 ゲ、オノエスゲ、ヌイオスゲ、クロヌマハ
 リイ、タカネクロスゲ、ミヤマホソコウガ
 イゼキショウ、エゾイトイ、クロコウガイ
 ゼキショウ、タカネズズメノヒエ、ツバメ
 オモト、エゾゼンテイカ、ヤチギボウシ、
 クルマユリ、エゾバイケイソウ、リシリソ

ウ、コイチョウラン、ミヤマフタバラン、
 フリドオシラン、ノビネチドリ、キソチド
 リ、トキシソウ、以上51種。

2. 18世紀のシベリアの植物文献

ドイツの植物学者グメリン(J. G. Gmelin)は、1733年から1743年迄の間にシベリアの植物調査をおこなった。その成果は「シベリア植物誌」として4巻にまとめられ、1747年から1769年にかけて、帝政ロシア時代の首都セント・ピーターズブルク(現レニングラード)で出版された。本書に使われている植物の学名は、現在の学名のような二名法ではないので、クモイリ

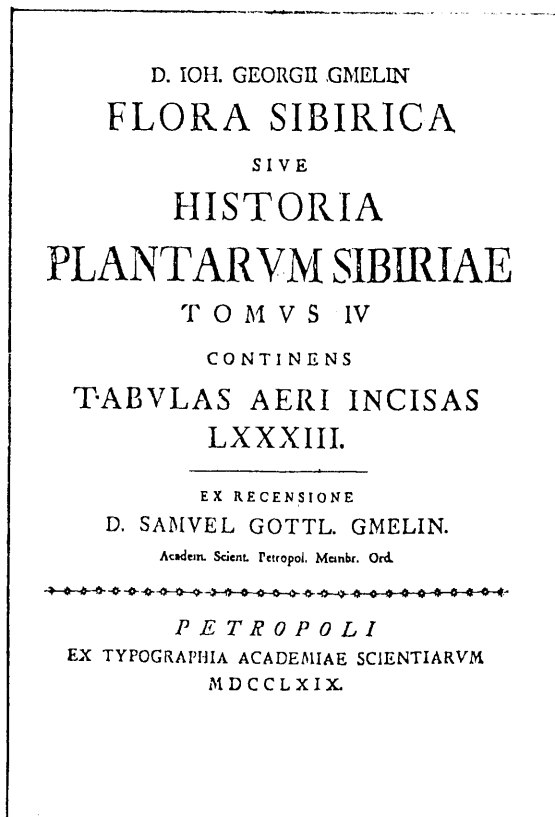


図1. グメリン「シベリア植物誌」第4巻 (1769)のタイトル頁

ンドウの母種トウヤクリンドウには *Gentiana floribus terminalibus diaphanis* (「茎頂に色の無い花をつけるリンドウ」の意) という長い学名がつけられている。本書は日本にも幾セットかは存在し、北海道では、北大農学部植物学教室図書室および理学部植物学教室の蔵書中にある。

106 OLIGANTHERAE.

74. *GENTIANA* corollis quinquefidis hypocrateriformibus fauce barbatis, LIN. *Sp. pl.* 1. p. 334. n. 22.

Gentiana pratensis, caule lanuginoso, BAVH. pin. 158. *Ind. Irc.* 349. *Len.* 738.

Eadem pumila T. LI. B.

Gentiana pumila, *centaurii minoris folio*, flore piloso, *Ind. Len.* 225. STELL. *Ocbot.* 5. 78.

Nascitur in omni Sibiria, et florum colore multas varietates subit, qui e *Camschatca* missi sunt, amplissimi erant, varietas 1. insignis est, et corollis gaudet respectu plantae naturalis maioribus, proveniens ad *Lenam* fluvium vsque ad mare orientale.

75. *GENTIANA* floribus terminantibus diaphanis, GM. *Infl.*

Gentiana rupestris, folio plantaginis angustifoliae, flore albo diaphano, striis et punctis caeruleis vario, STELL. *Irc.* 4.

Non videtur haec planta, nisi varietas. *G. pneumonanthes* esse, loco suo natali producta. Sed quemadmodum illa singularia multa habet, fuscus hic e flora STELLERI ircutiensi, quae ad historiam ipsius pertinent, adferre, lectori non displicebit, iungendo optimi auctoris descriptionem; ita autem ille:

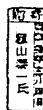
Gentiana haec in vertice rupium altissimarum circa *Bargyminum* hinc inde perpetua niue rigentium d. XXI.

図2. グメリン「シベリア植物誌」第4巻の106頁。75はトウヤクリンドウの学名と記載文。

グメリンの「シベリア植物誌」に載った二名法によらない植物の学名については、1841年に、やはりドイツの植物学者でロシアの植物を研究したレデボール (C. F.

von Ledebour) により、二名法による学名と対照して解説された。

6020



Commentarius

J. G. Gussone Floram sibiricam

C. F. v. Ledebour.

図3. レデボール「グメリンのシベリア植物誌 解説」(1841年)

18世紀末になって、やはりドイツの植物学者のパラス (P. S. Pallas) によりロシアの植物研究がなされ、1784年から88年にかけて「ロシア植物誌」2巻が、セント・ピーターズブルクで出版された。表題はロシア植物誌であるが、シベリアを含む極東地域の植物も多数、本書中で命名されている。トウヤクリンドウ、ヨコヤマリンドウ、チンマセンブリに正式に学名命名がなされたのは本書である。大型の本なので、グメリンの「シベリア植物誌」よりも日本の図書館では数がすくない。北海道では、

北大農学部の植物学教室の図書室に蔵書されている。図版が彩色されているので、植物の花の色なども、単に文字だけの記載と違って判りやすい。

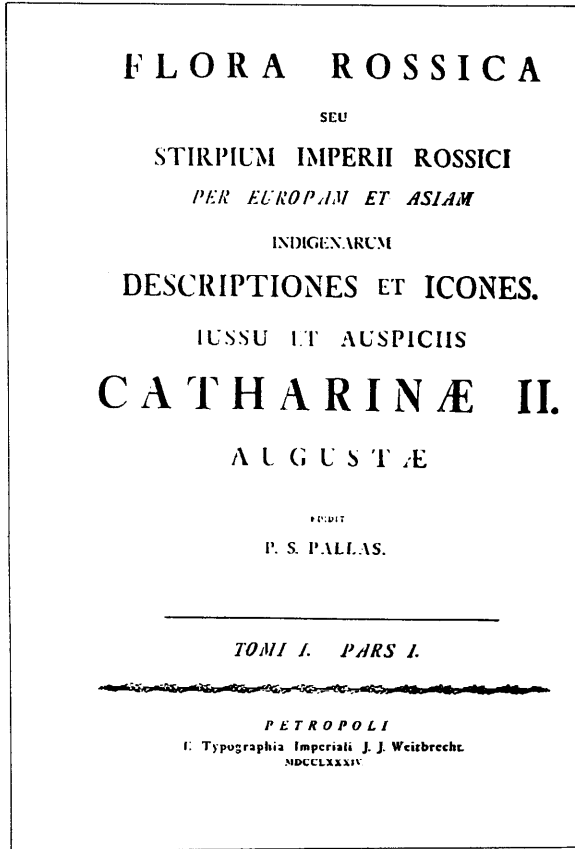


図4. パラス「ロシア植物誌」第1巻のタイトル頁(1784年)

3. 19世紀のシベリアの植物文献

19世紀に入って、シベリアを含む極東、およびロシア全体の植物調査は活発になる。この時期に活躍した主要な植物学者を出生年代順に記すと次のようになる。フィッシャー(F. E. L. von Fischer)、レデポール(C. F. von Ledebour)、メイヤー(C. A. von Meyer)、ツルチュザニノフ(N. S. von Turczaninow)、ブンゲ(A. A. von Bunge)、トラウトヴェッター(E. R. von Trautvetter)、レーゲル(E. A. von Regel)、マキシモヴィッチ(C. J. Maximowicz)、ハーダー(F. G. T. M. von Herder)、コルシンスキー(S. I. Korshinsky)など。これらの人々の多くは、セント・ピーターズブルクの植物園長の経歴を持つ。フィッシャーはメイヤーと共に、セント・ピーターズブルク植物園の種子目録(1835-1838)を書き、その中で、日本の高山植物に関係あるいくつかの新学名を発表している。レデポールは、1841年から1851年迄かゝって「ロシア植物誌」全4巻を完結しているが、前記のパラスの「ロシア植物誌」と比較するとぐっと種類数が増えている。ツルチュザニノフは、1838年に「バイカル地方およびダフリアの植物目録」を出版し、1842年から57年にかけて「バイカル-ダフリア植物誌」を完成している。後者の中には、サンプリンドウの母種の記載がある。ブンゲは、1831年に「中国北部採集植物目録」を発表している。トラウトヴェッターはメイヤーと共同で1856年「オホーツク地方頭花植物小誌」を著し、シベリア北東部の

植物に
名は本
はチリ
1858年
た。こ
と記載
ーダー
けて「
nae)。
Radde
載して
マキタ
マキシ
日本の
ヤマノ
多数記
ムール
属は、
終りに
「東部
紀に入
rov)
Busc
大活躍
って来
機会

植物につき記述をした。エゾカンゾウの学名は本書の中で発表されている。レーゲルはチリング (H. S. T. Tiling) と共に、1858年「アヤン地方植物小誌」を発表した。この中にはチシマニンジンの学名命名と記載文が載っている。更にレーゲルはハーダーとの共著で、1862年から87年にかけて「ラッデの植物 (Plantae Raddeanae)」を出版、ラッデ (G. F. R. J. Radde) が東シベリアで採集した植物を記載している。ナガハキタアザミの母種チシマキタアザミは、この中で命名されている。マキシモヴィッチは日本に来たこともあり日本の高山植物も、ナンブイヌナズナ、オヤマノエンドウ、ミヤマリンドウ、その他多数記載発表しているが、1859年に「アムール植物誌」を出版した。ツルリンドウ属は、この中で設立されている。19世紀も終りに近い1898年に、コルシンスキーの「東部ロシア植物誌」が出版された。20世紀に入って、コマロフ (V. L. K. Komarov) やブッシュウ (N. Busch および E. Busch) およびフルテン (E. Hultén) が大活躍し、極東北部の植物相が明らかになって来るが、20世紀の研究については別の機会にゆずることとする。

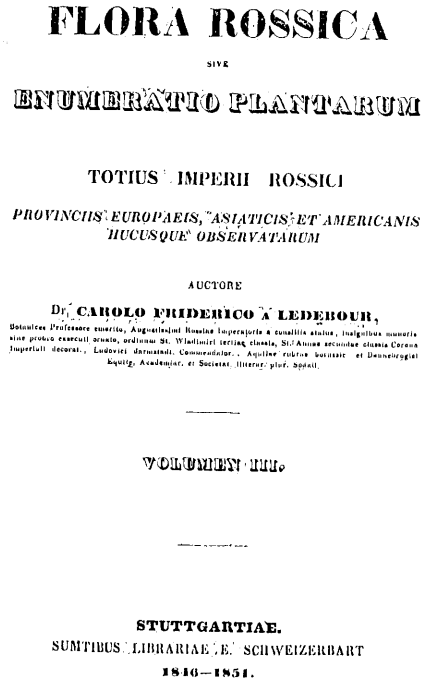


図5. レデボール「ロシア植物誌」第4巻の扉



図6. マキシモヴィッチ「アムール植物誌」の扉